

西アフリカにおける安全対策について —ブルキナファソでの勤務経験を踏まえて—

一般社団法人 海外邦人安全協会 専務理事

松原 英夫

Hideo MATSUBARA

平成3年外務省入省・本省アフリカ第1課、
在カメルーン大使館、在仏大使館、在ニュー
ヨーク総領事館、在ホーチミン総領事館、
在仏大使館領事部長、本省領事局旅券課上
席専門官、領事局政策課企画官・領事体制
強化室長、在ブルキナファソ大参事官、
在ギニア大特命全権大使を経て海外邦人安
全協会 (JOSA) 専務理事。

はじめに

私は昨年7月から一般社団法人「海外邦人安全協会 (JOSA)」の理事として、海外に渡航する日本人の安全に関する情報提供を任務として業務の一端を担わせていただいております。

過去には外務省に勤務しフランス (パリ)、米国 (ニューヨーク)、ベトナム (ホーチミン) において領事として勤務しました。また、カメルーン、ブルキナファソ、ギニアのアフリカ3カ国に勤務した経験があります。

これらの経験を踏まえ、機関紙「アフリカ」へ投稿させていただくこととなり、本日は「海外邦人安全対策」を担う団体職員の観点から、当時頻発していた「ブルキナファソでのテロ事件」を事例として私見を述べさせていただく次第です。

1 海外安全対策広報と その手法の重要性について

海外における日本人の安全確保は、外務省が行っている重要な業務の柱の一つです。私は在外公館赴任の際には在留邦人や旅行者の皆様を第一に考えて任務に当たってきました。他方で、我々「在留邦人を守る側」が発信する安全対策広報を、どのようにすればより効果的に情報の受け手である人々の関心を引き起こすことができるのかという点に注意を傾けてきました。

最近、情報の受け手の価値観の違いについて考える機会がありました。社会には様々な安

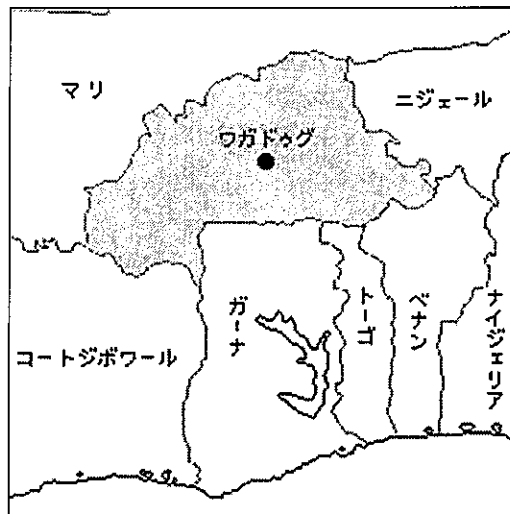
全対策がありますが、身近で一般の人々の関心が高い「資産管理」のための安全対策と「海外安全対策」を比較してみました。

海外安全対策では主に「外務省職員」が国として日本人を守るために力を注いでいますが、資産管理の安全分野では「ファイナンシャルプランナー」が活躍しています。彼らが提供する情報は、将来の資産形成やリスク管理など、数字や成果に直結する具体的なリスクや収益を可視的に提示しています。例えば税金の節約や資産の増加といった具体的な成果が示され、投資と費用対効果を比較する上で明確になっています。

一方で、「海外安全対策」の情報は、万一のための事件・事故やトラブルを未然に防ぐための「備え」に過ぎないと捉えられ、実際に問題が発生しなければその効果が数字として表れないため、投資効果が見えにくく費用対効果も不透明になりがちです。さらに、人は日常生活で何気なく危険と隣り合わせで生活していますが、実際の危険を身近に感じにくい傾向にあり、「私だけは大丈夫」という過信を生み、万一のための海外安全対策に積極的関心と投資をしようという意識を育みにくい傾向にあります。

このように、具体的な成果が見えやすいファイナンシャルプランナーの提案と、投資と効果が見えにくい海外安全対策の広報との間には、費用対効果を意識する人間心理が背景に存在すると思われます。人間心理による偏見は、海外邦人安全対策を立案・推進する上での障害となっています。そこで、ブルキナファソで発生したイスラム過激派によるテロの「具体的な事例」と「対応」について紹介することにより、海外で

図1:ブルキナファソ周辺地図



外務省ホームページより抜粋

発生している事件を人々が自分のものとして関心を持っていただき、海外安全対策への価値強化に繋がることを願い筆を取った次第です。

1. ブルキナファソと イスラム過激派によるテロ

西アフリカに位置するブルキナファソ（首都はワガドゥグ）は国土の大半が半砂漠とサバンナ地帯からなり、周辺をマリ、コートジボワール、ガーナ、トーゴ、ベナン、ニジェールの6カ国に囲まれた内陸国です（地図1参照）。

同国では2014年以降、テロが激化し、その多くは北西部に国境を接するマリや北東部のニジェールから侵入したイスラム過激派武装集団によるものです。2015年4月から2018年5までの3年間にも134件のテロ事件が発生しています。

2. ブルキナファソでテロが頻発した理由について

(1) 従来ブルキナファソ周辺では、サヘル地域でのイスラム過激派が台頭し、隣国マリ、ニジェールとの国境周辺地域で過激派による誘拐事件や襲撃事件が発生していました。しかし、2010年代前半までブレイズ・コンパオレ大統領(当時)が水面下で過激派と交流を行い、ブルキナファソでのテロ発生を防いでいました。その後同大統領が失脚し(2014年10月)、ロック・マルク・クリスチャン・カボレ大統領(2015年11月)が就任するとイスラム過激派との交流に決別を宣言し、対決姿勢を示したことでテロが激化しました。また2014年にはサヘル地域でマリ・ニジェールを中心として猛威を振るうイスラム過激派の封じ込めを目的として、フランスが主導しマリ、モーリタニア、ブルキナファソ、ニジェール、チャドの5カ国からの地域軍から構成されるG5サヘルを発足し、カボレ政権は対過激派軍事協力の枠組みで派兵を行ったことがブルキナファソでの大規模なテロ発生へと繋がりました。

イスラム過激派はブルキナファソのソフト・ハードの双方をターゲットとしたとしたテロ攻勢を展開しました。

特に当時マリ北部地域の状況悪化に伴い、過激派はマリとの国境(全長約1000km)を越えブルキナファソに侵入を繰り返し、国境近隣の役所や学校等を襲撃しました。また貧しい国境沿いのブルキナファソ人をリクルートしてテロ活動をさらに活発化させました。

当時の治安対策について、前コンパオレ政権下では大統領府直下にRSP(大統領警護隊)が置かれ、同組織が軍、憲兵隊からの情報を

管理し指揮していました。しかし、民主政権を標榜するカボレ政権下では大統領直下にANR(国家情報庁)が置かれていましたが、ANRは単独で情報収集を行うのみの機関であったため機動性に乏しく、治安コントロール能力が低下していました。これもテロリストの進攻を容易にした要因の一つとなりました。

2 | ブルキナファソの首都で発生した3件の大規模テロ事件と安全対策を考える。

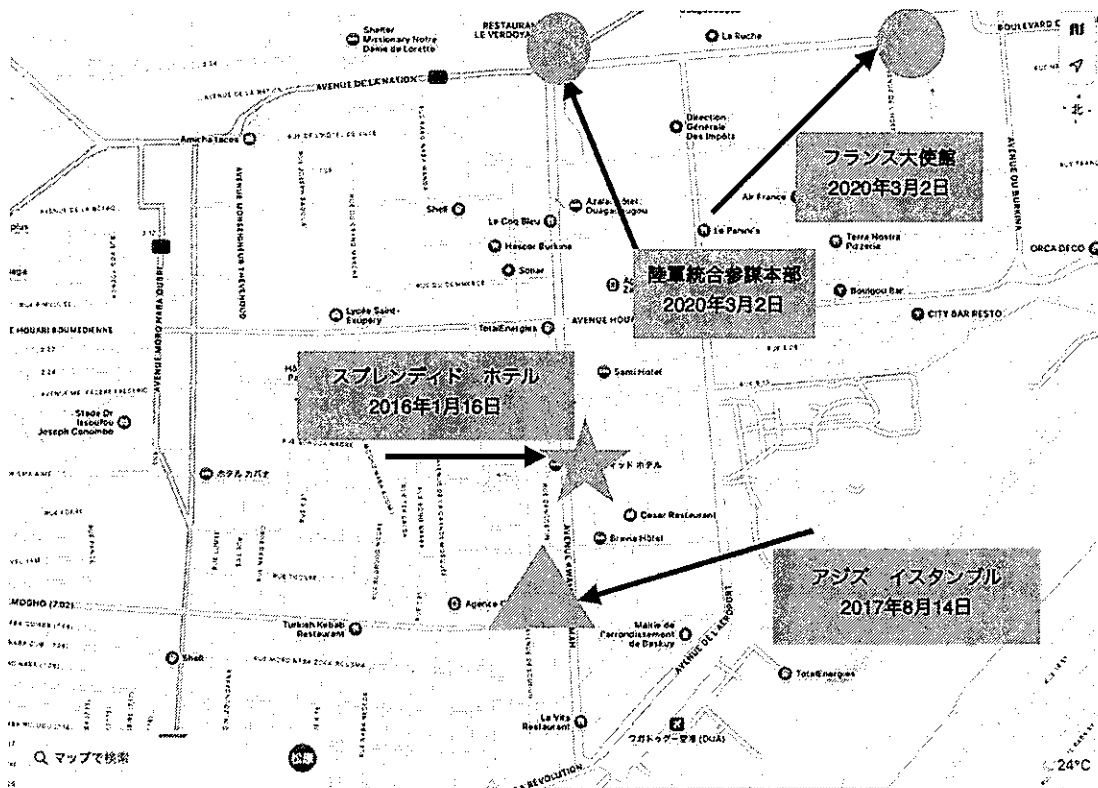
ブルキナファソで発生した過激派によるテロ事件は、カボレ政権発足後のイスラム過激派との交流の決別と、G5サヘルによる過激派との対決の結果、激化しました。特に2016年から2018年にかけて官民施設を狙った3回の大規模テロが発生しました(地図2参照)。それぞれの事件概要とヒントとなる対策を以下に示します。

(1) カフェ「カプチーノ」・ホテル「スブレンディド」襲撃事件

2016年1月15日19時30分頃、ブル族の羊飼いに扮した3人の武装した襲撃者が車両2台でクワメ・ンクルマ通りに到着し、自らの車両を爆破した後、西欧人の客が多く訪れるカフェ「カプチーノ」内に立ち入り発砲を開始しました。続いて襲撃者は見物人を遠ざけるために路上で数発発砲した後、「スブレンディド」ホテルに侵入し攻撃を加え、人質を取って立て籠もりました。

スブレンディドホテルは欧米の外交官などが多く利用する高級ホテルですが、このテロ攻撃

図2:ワガドゥグの大規模テロ地図



に対するブルキナファソ治安部隊の対応は遅く、治安部隊の現場到着は攻撃を受けてから約2時間後でした。また部隊の装備も貧弱であったため占拠されたホテル捜索は更に数時間後のフランス特殊部隊の到着待つこととなりました。

最終的に翌16日未明に治安部隊が突入し、人質を解放しました。

この襲撃により「カフェ・カプチーノ」で30名が死亡しました。「スプレンドイドホテル」では71名の負傷者を出しました。

襲撃者3名は全員死亡しましたが、遺留品の携帯電話から襲撃者の足取りが判明しました。

3日後にイスラム・マグレブのアルカイダ AQUIMが犯行声明とその後襲撃に関する詳細なプレスリリースを発表しました。

(2) トルコ料理店「アジズ・イスタンブル」襲撃事件

2017年8月13日21時過ぎ、クワメ・ンクルマ通り沿いのトルコ料理店「アジズ・イスタンブル」が襲撃されました。

この料理店も襲撃された「カフェ・カプチーノ」同様人気が高く、当日は満席状態でした。

死者18名、負傷者22名が出る惨事となりました。犯人は2名で、オートバイで乗り付け銃

撃し店内に立て籠もりました。治安当局は翌朝5時頃に掃討作戦を終了し犯人2名は射殺されました。この事件については遺留品等による手掛かりは見つかっていません。現地の情報では襲撃者はマリもしくはブルキナファソのプール族と推定されると報ぜられています。また犯行声明は出されていません。

ソフトターゲットとなる

施設を利用するための安全対策

(ア) 上記 (1) (2) の襲撃について、いずれも欧米諸国人が常時利用する高級ホテルやカフェ・レストランであり、防備も手薄であり襲撃によるインパクトの高い、反西欧主義を掲げるイスラム過激派にとって格好のソフトターゲットであったと考えられます。

ブルキナファソに見られるような、日常的に反西欧のテロの脅威に晒されている地域では、テロ攻撃に対して脆弱な施設の利用について私たち日本人も十分に警戒する必要があります。

特に日常的に利用する可能性のあるホテル、カフェ、レストラン、スーパーマーケット、ショッピングセンターなどの身を守るための利用方法について習慣付ける行動が必要であると考えます。

(イ) ソフトターゲットとなる施設の利用方法の例
私が個人的に実践している例を下記の通り紹介します。

■ホテル

- ・チェックイン後ホテル内の非常口、通路を確認しておき、緊急時に脱出路の選択肢を複数確認しておく。
- ・夜間時の対応のため小型の懐中電灯、火災発生時に煙を避けるために頭から被れる透明で

大きなビニール袋を携行する。

- ・ホテルの朝食会場での食事は人の少ない早朝に済ませよう心掛けてください。テロ攻撃は夜間だけではないと心がけましょう。

■カフェ、レストラン

- ・上記で紹介した過去のテロ襲撃の事例から、襲撃は客が満員、宴たけなわの頃を見計らって襲撃があるため、カフェ、レストランでの夜の食事の場合客が増える前に食事を終え立ち去るよう心がける。

- ・カフェ、レストラン利用する際に緊急時に脱出するための出口や通路の確認する。また着席する場所は客が出入する玄関の様子が確認できる奥に座り、異変を察知した際には速やかに脱出できる準備を整えておく。

■スーパーマーケット、ショッピングセンター

- ・生鮮食料品、日用品を購入のためにスーパーマーケットやショッピングセンターの利用は日々の生活を維持する上で不可欠ですが、これも客数が増える前（例えば開店の午前10時に入店し11時前）に退店することを心がける。
- ・テロリストはできるだけ多くの犠牲者を成果として狙うため、満員と盛況となる時間は要注意であると認識しておく。

(3) 陸軍統合参謀本部及び フランス大使館襲撃事件

2018年3月2日10時頃、首都ワガドゥグ市内中心部に位置する軍統合参謀本部と約1500m離れたフランス大使館が同時に武装集団に襲撃され、現地軍当局と仏部隊との間で銃撃戦となりました。軍関係者8名が死亡し、襲撃者8名も死亡しました。また、85名の軍人、民間人の

負傷者を出す事件となりました。

(イ) フランス大使館への攻撃

3月2日午前10時頃、AKM銃で武装した私服の4名の襲撃者がフランス大使館前に現れ、同大使館正面出入口から出庫しようとした車両のためゲートが開いた隙を狙い、大使館内部への侵入を試み銃撃戦となりました。

しかし、フランス大使館の正面出入口は侵入防止のため二重扉が設置されていたため、襲撃者は侵入することができず、約2時間後到着したフランス軍部隊により排除されました。

また、フランス大使館の建物へは敷地を囲う壁から十分に離れた距離に建設されていたため、一部銃弾が窓ガラス等に着弾したものの大きな物的被害や人的被害は発生しませんでした。正面入り口付近には防弾ガラス付きの受付があり、銃撃を受けましたが、設置された防弾ガラスを貫通することはありませんでした。

(ロ) 陸軍統合参謀本部への攻撃

同時刻、襲撃者は爆発物を積んだ車両を参謀本部に突入爆発させ本部建物に甚大な被害を与えました。襲撃者と軍双方で銃撃戦が展開され、軍は午後2時頃鎮圧しました。爆弾車両は当日G5サヘルの会合が行われる予定の建物を狙ったものと見られましたが、直前に場所が変更されたことにより被害は最小限に抑えられました。

翌日、イスラム過激派組織「イスラムとムスリムの支援団」JINIM（当時のリーダーはイヤド・アグ・ガリ）が犯行声明を発出。今次テロ攻撃は「マリ北部で複数の指導者がフランス軍に殺害されたことへの報復」としています。

ハードターゲットとなる

施設のための安全対策

フランス大使館が長時間の襲撃に堪え、撃退できたという結果から、まさにフランス大使館は物理攻撃の対象となることを前提に設計され、建築されていたということを証明しています。

テロが発生する可能性のある地域の日本大使館もフランス大使館の構造を参考に、敷地を区切る壁、壁と事務所の十分な距離、人、車の出入口の2重扉化、外部に面した受付により強靱な防弾ガラスの設置を基本的セットとして組み込むことに留意する必要があると感じました。